「濁った目でなく、澄んだ目で」
ヨハネによる福音書 7 章 10〜24 節

古代インドの古い言い伝えに、次のような物語があります。

王様の家に、4 人の息子(むすこ)たちがいました。四人はそれぞれ、どんな知識を究めるべきか、互いに論じ合っていました。そんなある日、一つの結論に達しました。「地を巡って、最高の知識を得てこよう」。そう言って、再会する場所を決めた後(のち)、彼らは各自、四方に散っていきました。

時が過ぎました。四人の兄弟は、かねて打ち合わせた場所に戻ってきました。四人は、皆がどんな知識を手に入れたのか、知りたくて気が急(せ)きます。「で、何をマスターしてきた？」 互いに、その成果を尋ねます。一人が答えました。「ぼくは、骨の欠片(かけら)さえあれば、そこから 元の生き物の肉を復元する方法をマスターしてきたよ」。すると、もう一人が答えます。「骨に肉が付いていれば、ぼくはそこを皮膚で覆って、そこに毛を生(は)やす方法を究めてきた」。と、今度は三番目です。「骨と肉と皮膚と毛があれば、ぼくは手と足を作ることができる」。そこで、これを聞いた最後の一人が言います。「姿格好が完全なら、ぼくはそこに 命を吹き込むことができる」

こうして、四人の息子たちはその知識を試そうと、連れ立って、ジャングルの中に入っていきました。しばらく行くと、地面に骨が落ちていました。彼らはその骨を拾い上げ、究めた知識を早速、実践に移します。初めの一人が、骨に肉を付けました。次はその肉を皮膚で覆って、そこに毛を生(は)やしました。三番目は、手と足です。そして、全体が整ったところで、最後の一人が仕上げにかかります。ついに、命が吹き込まれました。

と、そのときです。彼らの目の前に立ち現われたのは いったい、何だったでしょうか。それは、恐ろしい形相(ぎょうそう)で口を開(あ)け、鋭い歯を剥(む)き出(だ)しにしたライオンでした。ライオンはその獰猛(どうもう)な本性(ほんしょう)を露(あら)わにし、鬣(たてがみ)を振り乱しながら、爪を剥(む)いて 四人に飛びかかりました。そして、無慈悲にも、四人を一人残らず 殺してしまいました。こうして、ライオンは命をくれた恩人を亡き者にし、意気揚々と、ジャングルの中へと消えていったのでした。

知識はいのちを生み出すこともあれば、いのちを壊すこともある。私たちの知識や言動にはたしかに 人を生かす一面もあるものの、しかしそれらは同時に、人を傷つけたり殺したり、そして時には

自分自身をも滅ぼしたりする危険性も秘めている、と そのように教える物語と言えるでしょう。何千年も前の遠い古代の時代から、賢明な人たちはそのことをわきまえていたことが分かります。今日の私たちはどこかで、その頃よりずっと物知りになり、物事を知っている、分かっている、とそう思っているふしがなくもないのではないでしょうか。けれども、分かったつもりになっているこの私たちは ひょっとすると、事を見て考える賢明さにおいて、遠い昔よりむしろ後退してしまっているのかもしれない。そんな思いにもさせられます。私たちは本当に必要な知識と知恵とを持ち合わせているだろうか。私たちの知識や言動は、その根っこのところで いったい、何に基づいているのか。そして、この自分の知識や行ないは真実、自分を生かすものとなっているか。また、人を生かすものとなっているか、と そのように、今月の聖書の箇所は問いかけているように思われてなりません。そのうえで描き出されるのがほかでもない、イエス・キリストの真実です。人を壊す危険性も秘めたこの私たちの有りようとは対照的に、真のいのちへと人を生かすイエス・キリストの真実です。はたして何が、この私たちを豊かないのちへと育むのでしょうか。

さて 今月の箇所ですが、本文の内容に入る前に、幾つか言い回しについて説明するとともに、全体の流れを押さえておくほうが分かりやすいかと思われます。言い回しとは、「**ユダヤ人たち**」という表現と「群衆」という表現の意味するところです。「**ユダヤ人たち**」という言い方は 11 節、13 節、15 節に出てきますが、これは ユダヤの一般の人々を指すものではなく、いわゆる宗教的・政治的指導層のユダヤ人たちを意味しています。これに対し、12 節と 20 節に記されている「群衆」とは、エルサレムの周辺に住む人々を含めて、「祭り〔仮庵祭〕」(10、11、14) に詣でるために各地からエルサレムにやってきた巡礼者たちのことを指しています。これらの人々と、主イエスがエルサレムの神殿の境内で議論をされた。それが今回の場面です。

全体の流れは、次のとおりです。14 節、主イエスが神殿の境内で教えておられると、15 節、まず指導層のユダヤ人たちがその知識に驚きの声を上げます。これに対し、16 節以下、声を上げたその指導層のユダヤ人たちに向かって、イエス・キリストが語られる。すると、それに対して 20 節、群衆が口を挟みます。そして最後に、これを受けて 21 節以下、指導層のユダヤ人たちと群衆の両方に向かって、主イエスが言葉を語られる。やり取りが少しばかり 行ったり来たりしますが、全体の流れはこんなぐあいです。

事は 10 節にあるとおり、イエス・キリストが「祭り〔仮庵祭〕」に上っていかれたときのことでした。ただ、この冒頭から きっと、紛らわしく思われる方もおられるかと思います。前回、7 章の 1 節から 9 節を学んだ折、祭りに上っていったらどうか、と言う兄弟たちに対し、主イエスがこれを斥けておられるからです。8 節には、こう記されていました。「**わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである**」。なのに、実際には上っていかれた。いったい どういうことなのか、ということです。今月の主題とは直接 関連しないため、ここで細かな解説は省きますが、少しく触れておいたほうが読み進めやすいかもしれません。要は、こうい

うことです。第一に、主イエスは、前回の３節で兄弟たちが煽(あお)ったように、なにがしかの「業(わざ)」を、すなわち なにがしか奇跡的なしるしを見せるために出かけられたのではなかったということ。つまり、兄弟たちの煽動(せんどう)に乗せられるかたちでエルサレムに向かわれたのではないということです。事実、10 節に記されているように、主イエスは「人目を避け、隠れるようにして上(のぼ)って行(い)かれ」ました。また、14 節には、「祭りも既(すで)に半ばになったころ、イエスは神殿の境内に上(のぼ)って行(い)って・・・」とも書かれています。当時、仮庵祭をはじめとする エルサレム神殿での３大祭(たいさい)には、巡礼団が各地から群れをなし、大挙してやってきました。人々はその一団に加わり、祭りの始まる前にエルサレムに入るのが常でした。が、イエス・キリストにとって そうすることは、御自分がエルサレムに向かっていることを表立って公(おおやけ)にすることでした。語るべきことやなすべきことが、まだ幾つも残されています。今、騒動を大きくして、それらをしにくくすることは避けなければなりません。ですから、「人目を避け、隠れるようにして上(のぼ)って行(い)かれた」のであり、しかも 日をずらして、「祭りも既に半ばになったころ」そうされたのでした。兄弟たちの挑発に乗せられ、人々に奇跡的なしるしを見せるために赴かれたのではなかったからです。そもそも、主イエスはこのとき、祭りそのものに加わることを第一として エルサレムに向かわれたのでもありませんでした。これが第二の点で、そうではなく、「イエスは神殿の境内に上(のぼ)って行(い)って、教え始められた」と 14 節にあるとおりです。つまり、このとき 主イエスがエルサレムの神殿に赴かれたのは、何より 神の言葉を語り教えるためだった。そのために、主イエスはそこにおられたのでした。十字架への道備えとして それは必要なことであり、各地から大勢(おおぜい)の人たちが集まる仮庵祭の時は そのための又とない機会だったからです。

こうして、イエス・キリストはこのとき、神殿におられました。ところが、その主イエスを取り巻いていたのは、ユダヤの政治的・宗教的指導者たちの憎しみでした。そして、その憎しみは今や、殺意にまで膨れ上がっていました。11 節には、「祭りのとき ユダヤ人たちはイエスを捜し、『あの男はどこにいるのか』と言っていた」と記されています。年に一度の大祭です。彼らは、主イエスも来られるものと思っていたのでしょう。見逃さないよう、目を凝らしています。12 節、13 節を見ると、こうも書かれています。「群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。・・・しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」。ここからも、ユダヤの指導層の間で 主イエスに対する敵意が膨らんでいたこと。そして、それは人々に広く知られていたことが分かります。

主イエスが神殿で教え始められたのは、そうしたただ中ででした。神殿の境内で小さな輪をつくり、そこで言葉を交わしながら、教えを行なう。それは、当時の習わしとして、珍しいことではありませんでした。聖書の取り次ぎと問答の、静かな時でした。十字架への道を整えるため、イエス・キリストはそのようにして、祭りに集まった人々に教え始められました。すると、それを聞いていたユダヤ人たちから、声が上がります。15 節、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」。「学問をしたわけでもないのに」とは、

今日的な言い方をすれば つまりは、学歴もないのに、ということです。当時の情況に即して より具体的に言うなら、誰の弟子でもないのに、ということになります。そして、その裏にあったのはほかでもない。我々の一員ではない。身内でもなければ、仲間でもない。なのに、我々と同じように、神殿で聖書を教えている、という 彼ら指導層の苛立ちでした。縄張り意識的なそれとでも言えるでしょうか。「学ぶ」ということは、言うまでもなく、大切なことです。学ぶことを止めたとき、すなわち 向上心を失ったとき、それはいわば、死ぬことを意味していると言えなくもないからです。ですが、それはそれとして、私たちがいつも忘れてならないのは、何のために・どんな思いから・どのような知識を求めるのか、ということではないでしょうか。我欲のために いのちのない干涸びた知識ばかりを蓄えても、それは人を生かすどころか、殺すものにさえなりかねません。しかも、いわゆる学歴のない者を見下し、馬鹿にするようなことがあるとしたら。そんな知識なら、初めから持たないほうがよいとも言えるでしょう。例えば、バプテスト教会では総会のとき、小・中学生の教会員にも牧師と同じように 一票を投じる権利を保障しています。それは、神は時に この世の世故に長けていない子どもたちの内にその御旨を示されるやもしれない、訳知り顔の大人にではなく、との信仰によっていると言えはしないでしょうか。そもそも、一般の信徒はもとより 牧師も含め、いわゆる正規の学業を積んだからといって、それがそのまま 神の事を取り次ぐ保証になるわけでもないはずです。だから 学業は不要、というような乱暴な話でないのはもちろんですが、要は、私たちの様々な思いが時として その在り方を歪めることがある、ということです。だからこそ、私たちはまずもって神の前に、そして その故に、人の前にもまた 謙虚でなければならない。そして、真実 人を生かすいのちの言葉を祈り求めなければならないと思わされます。そのようにして初めて、神からの言葉に触れ、神によって示される知識に導かれるのではないでしょうか。

ですから、主イエスは言われます。16 節、「**わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである**」。そして、言葉を続けられます。18 節、「**自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない**」。これは 言うまでもなく、直接的には、ユダヤの指導層と主イエス御自身について言われた言葉です。しかし、と同時に それだけでなく、この私たちにも向けられている言葉なのではないか、と そう思わされます。なぜなら、何かにつけ、自分の欲得ばかりに心を惹かれる私たちがいるからです。そして、相手を自分の方に引きずり込もうとします。けれども、そのようなところでは、耳を傾けて 相手に聴くということは起こらないのではないでしょうか。ましてや、相手を真実 理解することなど、どうして起こりうるでしょうか。事は神についても同じで、神を飾り物のようにしているかぎり、そのようにして 神にではなく自分自身に目を惹きつけようとしているかぎり、神の知識に触れることは叶わない。それゆえ、信仰のいのちが宿ることもないように思われます。

こうして、ユダヤの指導者たちは心を貧しくして神に聴くことなく、イエス・キリストを亡き者にしようと企てます。そこにあった思いとは はたして、どんなものだったのでしょう？ もしかすると、自分の立場がまずあって、それに異を唱える者を訝しく思う。そして 反感をつのらせていく、と

いう よくあるそれだったかもしれません。つまり、自分がまずいて、その自分の有りようを守ろうとする。ひょっとしたら 自分のほうが間違っているのかも、と どこかでそれとなく感じていても、自分をなおも正当化しようとする。私たち自身、誰もが知らなくもないあれです。それが時に、殺意にまで発展するとは・・・。なんとも言いがたい、私たち・人間の一面ではないでしょうか。そのようにして、人に耳を傾けず、神にも聴かなくなってゆく現実です。頑なさが人の言葉を弾き出し、神の言葉をも弾き出してしまう、と言ったらよいでしょうか。

ただ、ここで注意しなければならないのは、主イエスに敵意を抱いて これを亡き者にしようとしたのは、いわゆる悪い奴らではなかったということです。それは、政治的・宗教的指導者として知識もあり、良識もある。それどころか、聖書にも通じていた 教養ある立派な人たちで、品行方正な人々でした。おそらくは、彼らは 彼ら自身の信仰心から、すなわち、そうあることが神に忠実な信仰者の在り方だと 彼らがそう信じたその信念に基づいて 主イエスを非難し、これを排除しようとしたのでしょう。つまり、彼らの行為は必ずしも悪意からではなく、彼らなりの善意から出ていたと言えなくもない、ということです。たしかに、そのような側面も看過されてはならないように思われます。がしかし、たとえそうであっても、事のポイントは依然として変わらないのではないでしょうか。なぜなら、それがたとえ善意からであったにしても、彼らのそうした善意もまた、見るべきもの・聴くべきことに対し、その目と耳を塞ぐものとなってしまったからです。要は、善意であれ使命感であれ、信念であれ正義感であれ、神に向かい、その言葉に聴くべきときに、これを妨げ、そこから遠ざけるもの。それが問題視されているということです。ですので、プライドや優越感、縄張り意識や保身といったあれこれなどは、いわんや・・・と言えるでしょう。問われているのは しかるべきものに対して開かれた心であり、神とその言葉に対する真っすぐな在り方ではないでしょうか。それが忘れられるとき、そこに 神の姿は見られなくなる。神は消されて、いなくなる。その意味で、神は殺されてしまうのではないでしょうか。主イエスが人々によってそうされたように。そして そのとき、神はどこか、善良を装うための飾りになったり、居場所を守るための道具になったり、あるいは教養や文化のアクセサリーになったりするのではないか。そう思わされています。だとしたら、聖書の御言葉に向き合うとき、そして そこで人の本質に思いをめぐらし、自身について、神について、また信仰について考えるとき、私たちに求められているのはいったい 何でしょうか。それは、この自分の内にもそうした同じ陰がありはしないか、と問い直すこと。主イエスに対した聖書の人々と同じような陰がありはしないか、と 繰り返し自問することではないでしょうか。

実際、相手に対して心を開き、大切な存在として 真っすぐな在り方で相手と向き合う。そして、色眼鏡なしに、予断なくその言葉に聴き入る。そのようにして、向き合う相手に心を注ぎ出すということ。それは、私たちにとって そう容易でないのも事実です。私たちがとりわけ苦手とすることの一つかもしれません。しかしながら、まさにそのことが、神の御前においても求められているように思われます。神と真っすぐ向き合い、自らの都合や願望ではなく、神 そのお方の心を求めて、その言葉に集中することです。そのようにして 神の御心を求め、その栄光を求めるように、と 主イ

エスはそう言われます。そして、人はそのとき「真実な人」と言われ、「不義がない」と言われる（18)、と。ここに至って、私たちは気づかされるのではないでしょうか。そのように生きられ、そして それを貫かれたのはいったい、誰だったか。それは ほかでもない、そう語られたイエス・キリスト御自身だったということに、です。「自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない」と 聖書が記すとおりに。

ここで、一つの言葉に心を惹き寄せられる思いにされます。これまでのやり取りを考えるにつけ、いかにも避けて通れない言葉のように思われるからです。それは、マルティン・ブーバー（Martin Buber）という哲学者のそれです。オーストリア生まれのユダヤ人で、ユダヤ教に通じた哲学者、社会学者として知られています。世を去って すでに多年になりますが（1878～1965 年)、今なお広く知られるその著『我と汝』の帯には こう記されています。「公刊以来、西欧の思想界に大きな影響を与えて来たマルティン・ブーバーの不朽の名著『我と汝』・・・。その思想は時代を越え、切ったら切り口からドクドク血の出るほど劇しい生命力をもって 今日に生きている。現代の危機を洞察指摘した著者の卓見は、かならずや 読者の心に深い感銘を与えるであろう」。ブーバーの思想の根っこには「出会い」という出来事がありますが、各方面で繰り返し引用される言葉に、次のような有名な一節があります。哲学者のもので、少々面倒で分かりにくい表現ですが、少しく辛抱していただければ幸いです。こんな言葉です。

ひとは世界にたいして 二つのことなった態度をとる。それにもとづいて 世界は二つとなる。

ひとの態度は、そのひとが語る根源語の二つのことなった性質にもとづいて、二つとなる。・・・

根源語の一つは われ－なんじ であり、他は われ－それ である。ただし、この場合、それのかわりに、かれ、あるいはかの女という言葉を使っても、根源語にかわりはない。

要点だけをひと言で申し上げるなら、私たちは 世界のあれこれに向かうとき、「わたしとあなた」と呼べるような、自らを懸けた 体重のかかった関わり方をしているか、さもなければ「わたしとそれ」とでも言うべき、単なる対象として済ます 物に対するような関わり方をしているか、そのいずれかである、と ブーバーは言うわけです。本質的には 物を含めたすべての存在がそこに含まれますが、なかでも人間同士の関わりについて、ブーバーはとりわけ そう語っています。そこでは、真実みの希薄な どこか他人事のような関わり方は、いわゆる物に対するそれと同じである。それは「わたしとそれ」という態度と同様であって、「彼」とか「彼女」とかいう場合も、自身と距離のある評論家的態度として、同じように「それ」的な関わり方でしかない、と。そして、ブーバーは次のように言うのです。

われ－なんじ におけるわれと、われ－それ におけるわれとは、たとえ言葉は同じでも、意味するところはまったく違っている・・・。・・・

われ－なんじ という根源語は、全人格を傾倒してはじめて語ることができる。

われ－それ という根源語は、全人格を傾倒して語ることができない。

決して 難しい世界のことではないでしょう。日常のことではないでしょうか。すなわち、私たちは人に接するとき、相手を単なる対象のようにして接することがありはしないか。物に対するようにして、ということです。そのとき、私たちの関係は「わたしとあなた」の ではなく、「わたしとそれ」の関係でしかなくなってしまいます。実際 そのようにして、私たちはしばしば、単なる情報源として、また手近な道具として、さらには一時(いっとき)の癒やしの手だてとして 人に接することがないとも言えません。SNS やオンラインでの、またバーチャルでの交流が瞬(またた)く間(ま)に拡散し、生身(なまみ)の触れ合いがいよいよ希薄になるこの先、そうした傾向がいっそう強まるのではないかと懸念されます。少なくとも、その種の誘惑や危険性は増しこそすれ、減ることはないのではないでしょうか。危惧されるところです。

事は、私たちの慣れ親しんだ言葉で言い直すなら、つまりは 真っすぐな誠実さ、というふうに言えるかもしれません。自(みずか)らの体重をきちんとかけて向き合い、自分の都合や自分の勝手という濁った色眼鏡(いろめがね)を外して、澄んだ目で相手の全体を見ることです。「我(われ)と汝(なんじ)」という在り方は たしかに、そうした誠実さを抜きにしては成り立たないように思われます。それがなければ、相手をどこか「それ」として眺め、半身(はんみ)で距離をキープしたまま、半ば塞(ふさ)がった目でそのあれこれを論評するようになるのではないでしょうか。そのようにして、相手ときちんと向き合うことなく その一部しか見ないことは、ブーバーに言わせると、盲目に通じ、憎しみに至るようにもなる、と述べています。

イエス・キリストは、17 節でこう言われます。「この（わたしをお遣わしになった）方の御心(みこころ)を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである」。これはまさに、ブーバーの言葉に通じるものと言えはしないでしょうか。つまり、ユダヤの指導者らは、主イエスを議論の対象としてしか見ていなかったということです。やり込めて黙らせる対象であり、自(みずか)らを弁護する対象であり、意に沿わないあれこれをあげつらって排除する対象でしかなかったのでしょう。群衆もまた、本質的には 変わりがなかったようです。「なぜ、わたしを殺そうとするのか」と 19 節でユダヤの指導者らに問いかけた主イエスに対し、彼らは 20 節でこう言っています。「あなたは悪霊にとりつかれている。だれがあなたを殺そうというのか」。群衆は、すでに触れたように、「ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」と 13 節に記されています。ということは、主イエスが命を狙われていたことは、誰もが知る周知の事実だった。けれども、人々はユダヤの指導者たちを恐れ、彼らの側に立ち、彼らに擦(す)り寄(よ)って、「あなたは悪霊にとりつかれている」と言ったのでした。ユダヤの指導層にとっても 群衆にとっても、イエス・キリストは「あなた」ではなく、「そ

れ」でしかありませんでした。そのような塞(ふさ)がれた目ではなく、また濁った目ではなく、澄んだ目で 事を見ること。良き目を開いてそうすること。そうすれば、私が自分の勝手を語っているのでないことが分かるはずだ。神からの言葉を語っているのが分かるはずだ、と 主イエスはそう言われたのでした。神の御心を真っすぐに生きようとしている人なら・・・と。

「モーセの律法」をめぐる 19 節以下のやり取りについては、簡潔に御説明をすると 次のような次第です。主イエスは 2 つの点から、あなたたちは律法を正しく守っていない、と指摘されます。一つは、律法の中心である「十戒(じっかい)」に厳然と「殺してはならない」(出エジプト 20：13) とあるのに、ユダヤの指導者たちは主イエスを殺そうとしていた、という事実でした。「モーセはあなたたちに律法を与えたではないのか。ところが、あなたたちはだれもその律法を守らない。なぜ、わたしを殺そうとするのか」と、19 節で 主イエスが言っておられるとおりです。そして あと一つは、安息日(あんそくび)には労働が禁じられているといっても、現に「割礼(かつれい)」は施しているではないか、という 割礼の事実に基づくものでした。割礼とは 御存じのように、男児が生まれたとき、生後 8 日目にその性器の皮に施す儀式ですが、命に関わる場合以外、いわゆる医療行為ですら 労働として禁じていたのが安息日の規定でした。ですから、割礼ももちろん、労働とみなされていました。ところが、なのです。ところが、生後の 8 日目がたまたま 安息日に当たった場合、それはいったいどう扱われていたか。割礼も労働であるはずなのに、その場合は例外的に、それを施すことが許されていました。主イエスは、そのことを言われたのでした。なぜでしょうか。それは、割礼が 神の民・イスラエルの一員とされるための儀式だったからです。神に選ばれた民の一員とされ、神に祝福された民の一員とされるための儀式だったからです。つまり、割礼がなされなければ、神の祝福からこぼれ落ちてしまう、救いから漏れてしまうと考えられていたわけで、ですから、彼らは割礼を安息日の規定以上のものとしていました。このように、彼ら自身が現に、人の救いを安息日の規定に勝(まさ)るものとしていた。そのことを、主イエスは指摘されたのでした。そして、言われます。「わたしが一つの業(わざ)を行(おこな)ったというので、あなたたちは皆 驚いている」(21)。覚えておられるでしょうか。5 章にあった「ベトザタの池の病人の癒やし」(5：1～18) のことです。一人の人の癒やしの出来事、救いの出来事でした。けれども、それはまさに安息日になされたもので、そのとき そのことが、ユダヤの指導者たちによって問題とされました (同 16)。労働を禁じた安息日の規定に抵触するとしたのです。しかし、主イエスは今また そのことに言及され、そして こう問い返されます。「モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であっても 割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をいやしたからといって 腹(はら)を立てるのか」(23)。すなわち、人を癒やすこと、人を救うこと、そのようにして 真(まこと)のいのちに人を生かすこと。それこそ、あなた方が現に割礼という儀式で行なっていることであり、何より大事なことではないのか。安息日自体、そもそもそのためのものであり、神の御心(みこころ)もそこにこそある。なのに、あなた方は自分らの都合に合わせて安息日の規定を持ち出し、救いの業(わざ)に努めるこの私を亡き者にしようとしている、と 主イエスはそう語られ、そして最後に、こう言われるのでした。24 節、「うわべだけで裁くのをやめ、正し

い裁きをしなさい」

そこにあったのは まさに、我(われ)と汝(なんじ)の関係ではなく、我とそれの世界でした。人々は保身や我欲(がよく)の私心を脇にやって、主イエスに真っすぐ向き合うことをしませんでした。その意味で、彼らにとって 主エスは一つのそれでしかなく、澄んだ目で 体重をかけて誠実に向き合うことがなかったと言えるでしょう。イエス・キリストはそのいのちのすべてを懸けて、私たちとの間に「わたしとあなた」と言いうる関係を築こうとして来られました。御自身と私たちとの間に、そして 神と私たちとの間に、互いの重みがズッシリと感じられるような 真実でかけがえのない関係を築こうとして来てくださいました。その主イエスにどう向き合うのか。私たちの姿勢が問われているように思われます。

私たち・人間にとって、苦しみとか苦悩とか言われるものは、挙げれば 幾つも挙げられるでしょう。しかし、独りであること、独りぼっちであること、本当の意味で 自分に深く関わってくれる人がいないこと、そして、そのようにして独りで死にゆくこと。それは間違いなく、何より深い苦しみの一つと言えるのではないでしょうか。

一人の患者さんと その方を訪ねた神学生との会話のひとこまがあります。患者さんは 48 歳。農業に従事する、働き盛りの男性です。足の動脈に異常を来(きた)し、手術のために入院。足首から下を切断せねばならなくなりました。翌日、手術が予定されています。その患者さんは心臓も悪く、手術には かなりの危険が伴います。そんななか、次のような言葉が交わされたといいます。

神学生　厳しい手術ですけども、足首から上を失わずにすむことを思えば、やっぱり手術はしたほうがいいですよね。義足を作れば、また足を使うことができるんですから。

患　者　そうね。手術中に死ぬのは嫌だけどね。麻酔で知らぬ間(あいだ)に死ぬより、自然死のほうがいいに決まってるからね。

神学生　命の危険が伴う手術だってこと、御存じなんですね。でも、手術をする以外に道がないっていうことも御存じなわけで・・・。

患　者　まあ、そのとおりってわけだ。

神学生　でも、退院したら、いろんな楽しみが待ってるってこともありますよね。

患　者　待ってるもんなんか、何もないさ。楽しいことなんか何もないし、誰も待ってやしない。待ってるのは、忙しい仕事だけ。それだけさ。

神学生　忙しい仕事だけですか。

患　者　そう、仕事だけさ。

医療の進歩が現在ほどでない だいぶ以前のことですので、時として そうした結果に終わることもあったのでしょう。この患者さんは、手術中に亡くなられました。なんとも悲しい結末です。

がしかし、それにしても、この患者さんにとって、明日(あす)という日はいったい 何だったのでしょ

う？ 退院したって、楽しみなんか 何もない。自分を待ってるもんなんか、何もない。待ってる人なんて、誰もいないさ、と言っていました。周囲に人がいなかったわけではないでしょう。いたはずです。けれども、いたのに いなかった、のです。ここにも、「我とそれ」の世界はあっても、「わたしとあなた」の関係がない。「わたしとあなた」と 本当の意味でそう言えるような真実の絆がなかった、ということなのではないでしょうか。手術の患者さんは、死ぬことを恐れていました。ですが、それと同時に、もしかすると それ以上に、生きることに苦しんでいたのかもしれません。生きることに疲れていた。心から体重をかけて向き合ってくれる、そうした真剣な「あなた」がいなかったからではないか。私には、そう思われてなりません。

独りぼっちであること。大勢の中の単なる一人とされること。そのようにして、物のように 単なる対象とされ、誠実で体重のかかった真実な関係が失われること。それは かけがえのない自分であることを私たちの内から消し去り、言いがたくも深い苦しみを私たちにもたらします。イエス・キリストはこのとき、そのただ中に 身を置いておられました。そして そこから、こう語りかけておられるように思われるのです、この私たちに向かって。自らを誇り、また自らを守ろうとして、自身の都合に合わせ、好みに合わせて 隣人に対さないように。そして 何より、そのような在り方でこの私に向かい、また 神に向かうようなことをしないでほしい。ユダヤのリーダーたちのように、また 時の群衆のように・・・。

主イエスはこうして、十字架への生涯を歩み続けられます。それは、御自身のすべてを懸け、偽りなく真っすぐ 人々に関わろうとされた生涯でした。その真実なお方を、その真実さの故に 疎ましく邪魔な者とした人間の現実。知識も知恵も、その内が澱んで濁っているとき、それは人を生かすものとはならず、逆に 殺意すら芽生えさせるのでしょう。しかし、イエス・キリストは それでもなお、人々の殺意を超え、さらには私たちの不信仰をも超えて、そして 私たちの孤独な痛みをその身に負って、十字架の生涯を全うしてくださいました。私たちの歩みは、主イエスのこの御姿に倣うこと。生ける主 イエス・キリストのこの御姿を内に頂くこと。感謝して、そのことを祈り求めるところから始まるのではないでしょうか。「汝」と呼びかけてくださる主イエスに、歪みのない、濁りのない澄んだ目を向ける。そして そこで、真実 豊かな関係に生かしていただく。確かな拠りどころは、そこにこそあるのではないでしょうか。それをおいてないように思われます。

〔祈り〕

愛する神様。

私たちに、澄んだ目と澄んだ心とをお与えください。そのひと欠片でも・・・。

あなたに対し、また隣り人に対し、誠実で手抜きのない心を向けることができますように。御子イエス・キリストの心をお与えください。そのひと欠片でも・・・。

御子のいのちを内に頂き、私たちもまた、自ら貧しくなって生きることができますように。そし

て そこから、家族と、友人と、隣り人と偽りのない歩みを共にすることができるよう、導きと支えとを 私たちにお与えください。日々に、繰り返し・・・。

主の御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン